

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第

卷二十三第

行發日一月六年六和昭

(禁轉載)

論叢

地方税に於ける貧者過重負擔傾向 . . . 法學博士 神戶 正雄
經濟理論に於ける時間 . . . 文學博士 高田 保馬
統計系列の基礎概念 . . . 經濟學士 蛭川 虎三

說苑

主觀價值說と貨幣價值論 . . . 經濟學士 柴田 敬
大都市に於ける所得の集積と分散 . . . 經濟學士 武田長太郎
米の生産と消費との連繫 . . . 經濟學士 谷口 吉彦

雜錄

大都市の土地の價格 . . . 經濟學博士 汐見 三郎
農業の機械化 . . . 經濟學士 八木芳之助
植民地に對する經濟活動の特質 . . . 經濟學士 金持 一郎
都市公企業の財政的意味 . . . 經濟學士 大谷 政敬

法令

抵當證券法・重要産業統制法・勞働者災害扶助法・勞働者災害扶助責任保險法・米穀法中改正・
自動車交通事業法

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題
本誌第三十二卷總目錄

經濟理論に於ける時間

高 田 保 馬

目次

一、靜態動態と時間との問題——二、最近の支配的見解(シュートレア)——三、動態と時間——
四、靜學と動學とは全く種類を異にする學問であるか(カレル)——五、その批判

一、靜態動態と時間との問題

經濟理論と時間との關係のあらゆる方面を考察することを今の仕事とするのではない。茲にはたゞ靜態動態の區別と時間との關係を明にしようと思ふ。近時、景氣の統計的研究に刺激せられてその理論的考察が漸く盛ならむとする。而も景氣理論の構成は靜態の理論に於けるが如く、僅少なる前提から出發することによりて到達せられない。事實の詳細なる統計資料をまちてはじめて知らるるところの、數多の前提を加へなければ構成せられがたい。かかる困難は自ら、動態の理論の學問的性質に關する考察、乃至反省を必要とするに至つた。この反省は自ら、靜態及び動態の區別と時間との關係に注意を向はせるやうになつてゐる。

私がここに取扱はうとするのは、靜態と動態との對立を以て時間の要素を取入れるか否かにあ

ると云ふ見解の是認しうべきや、如何にある。これと關聯して、動態を對象とする部分、即ち經濟學はあくまで經驗的歸納的科學であると云ふ主張の是非をも吟味しようと思ふ。此の仕事に入るに先だちて、靜態と動態との對立を私自身がどう見るかと云ふことを述べて置く。

靜態と云ふは、與件の變動せず、且つ競争、從ひて適應の行はれ得るだけ（どこまで行はれ得るかは種々なる事情によりて定められる）行はれてゐるが爲に、新なる變動の生じ得ざる狀態である。動態と云ふは、與件の變動するか、適應のそれ以上行はるか、又は此二の事情の共に作用するか、によりて、經濟に新なる變動の生ずる姿である。適應のそれ以上行はれざるまで行きつくし、而も與件の變動のみ行はる場合には、動ける均衡、又は均齊的に進行する經濟があるであらう。適應の不十分なときには、與件の變動なきものとすれば長期又は短期の景氣變動があらうし、それなしとするもなほ摩擦の除却までの變動があるであらう。與件も變動し、適應も不十分なときには、更に複合的な動態を生ずる。動ける均衡は一般に生長的な進行として考へられる。けれども一の限界概念としては發達を伴ふところのそれを考へ得ざるわけではない。しかしこれらの點は今の問題の中心ではない。かう見來れば、動態の靜態に對する特徴をなすものは、變動の内在である。經濟自體が必然的に一定の變動方向にさらされてあることである。勿論、此變動は多くの場合、與件の變動そのものに結びついてはゐる。けれども、與件の變動の一定の方向が與へ

られたるものであるとするときには、これに對する適應として、一定方向の變動が經濟そのものに内在してゐる。比喻をとりて云へば、一の有機體が變動する與件の下に置かることの前提せられてゐる場合には、身體的適應と云ふ變動が自體の中に内在してゐるが如くに。經濟の變動は常に時間を要してのみ行はるるが故に、此場合變動の程度はつねに、與件の事情にして與へられてゐる以上、時間に依存する、時間の函數として考へられ得る。從ひて變動の内在と云ふことは、時間と變動との對應 (Korrespondenz der Zeit und Veränderung) として表はされるはずである。

然れども、これだけでは、なほ説明が十分でない。靜態と動態とが相對立する爲には、その間に相互を區別すべき何等かの特徵あることを要するのみならず、此二者は同一の平面の上に立つものであることを要する。二者が對立的概念であると云ふことは、同一なる内容、即ち共通なる要素をある點まで含むことを前提とする。屢々述べたるが如く、經濟靜態は現實なる經濟の姿からあまりに遠い距離をもつところの一の限界概念である。從ひて一の純粹型としての理想型である。私はかつて經濟靜態と云ふは何等の變動なくして機能をつづけつつあるところの經濟の姿である、これに對して經濟動態と云ふのは靜態でないところの經濟の姿であると云ふ説明をした。けれども今は、此見方を修正する必要を感じる。

動態が靜態と相對立するものであり、靜態が一の極限概念であるならば、而して一の理論的に

(普遍化的立場から)構成せられたる概念であるならば、動態と云ふのもまた、さう云ふ性質を帯びたる概念であるはずである。それは勿論、單なる變動のない經濟狀態ではない。かう云ふ狀態としての動態は一々の具體的な經濟をも意味し得る。靜態に對立するものとしての動態は常に高度の抽象の上に立つ。特定の時間と空間とから切りはなされてゐることはもとより、その豊富なる内容からも切りはなされてゐる。極めて多くの現實に於ける條件が他の事情にして等しければと云ふ括弧の中に入り込められてしまふ。特定の與件の變動のみが一定の方向に向つて進むものとして豫め與へられる。これらの變動の極めて多くのものが與件として取入れらるる場合といへども、所謂偶然的變動だけは全く切りはなして考へられる。要するに、靜態概念はすべての與件の變動を抽象し、次に適應に伴ふすべての摩擦を切りはなして構成せられてゐる。これに對し、動態の概念は、その上に、摩擦が行はると云ふ條件を加へ、その上にまた、經濟的な生長、又は發展、又は外部市場の開拓と云ふが如き條件の一又は多(の一定方向)を與へられたるものと考へる。而してその事情の下に於て一定の方向に動くところの經濟の姿、これを動態として見る。要するに、動態は理論的に構成せられたる限界概念であり、而も、それと靜態との距離は、一に更に多くの條件が一定の方向に動くものとして與へられてゐると云ふだけのことである。この意味に於て二者の差異を抽象の程度の差異として見ることも、解釋の仕方によりては、決して誤ま

つてゐない。

解釋の仕方如何によりてはと云ふ理由はかうである。靜態に於ては、すべての事情が一定不變のものとせられてゐる、その中、重なるものの何であるかはクラ阿克以來説き古されてゐる。然るに動態にありてはその中、一定の事情又は條件が「他の事情にして一樣ならば」と云ふ括弧の中から取去られる、而して變動するものと見られる。けれども、此變動そのものが現實に見るが如く、偶然にさらされてゐるのではない（すべてのものは見方によりて偶然であり、又見方によりて必然である、これは今の見地から見ての偶然である、見地の内容は次に述べる）。これを支配する根本の原因の作用によりて一定の方向に動くものとする、その方向は如何やうのものにても構はない、客觀的に可能なるものであればいゝわけである。詳言すれば、此變動が現實の變動ではなくして、假定せられたる、客觀的に可能なるところの、而して理論の構成にたへ得るやう一定の方向をもつところのものであることを要する。従ひて抽象されずに残るものは、現實に見える變動ではなくして、あくまで構想せられたる條件變動である。

二、最近の支配的見解（シュトレラア）

さて最近に於ける支配的意見を見よう。シュトレラアに従へば、靜態と動態とは勿論概念對とベグリフスバアルして、抽象によりて同じ經濟對象から生起し構成せられたる二の異なる抽象等級である。『靜態及び動態の兩概念は、理論經濟學に於て、ただそれが二の相異なる抽象等級である時にのみ、或は一の概念が認識對象その物に相應し、他の概念が方法的理由によりてそれから引き出されたる、より高き抽象である時にのみ、同じ認識對象に屬し、一對をなし相互に補充するのである。』

かかる形式的區別を立てたる後、動態に於て、靜態には抽象せられてゐるものが抽象せられずにある、それは實質的に何であるか。それは時間、詳言すれば時間的間隔 (Zeitintervalle, Zeitstrecke) に外ならぬ。

シュトレアの見解の、叙述、批評については、米田博士の論文を参照せられたい。¹⁾ 此見解は可なり廣き範圍に影響を及ぼしてゐる様に思はれる。エリツヒ・カレルの見解は、動態の性質に關してシュトレアのそれと相距るにせよ、自ら相通ずるところがある。フオオゲルはカレルの立場に極力反對してゐるけれども、十分に靜態と時間との關係に關するその見解を顧慮してゐる。ロオゼンシュタイン・ロダンの一般均衡と時間の抽象とに關する見方、又は等時性に關する見解もまた、シュトレアのそれと相通ずるところがある。

勿論、シュトレアの立場とても、時間の概念要素だけで十分に動態の特徴をなしうるとは考へてゐない。『靜態は一々の經濟行爲の間に入りこむ時間から切りはなされたる經濟概念である、動態はそれに於て時間が重要な概念成分をなす經濟概念である。動態的概念はその補完的概念成分が時間の經過であるやうな概念である。靜態的概念はそれに於て時間が何等の概念成分をなさざるやうな概念である。』²⁾ 時間は動態を動態ならしめるものである。時間はそれによりて靜態の概念が決定せらるるところのものである。けれども時間は動態が靜態に化して更に多く保有するところの唯一の概念成分ではない。動態的理論がわれらの眼前にもち來すものはただに時間と云ふ概念成分だけに止まらぬ、時間と云ふ成分と思惟必然的に結びついてゐる概念成分である。

1) 米田博士、經濟靜學と經濟動態、經濟論叢 第二十九卷第五號、Streller, *Statik und Dynamik in der theoretischen Nationalökonomie*, 1926.

2) Streller, *Dynamik der theoretischen Nationalökonomie*, 1928, S. 3.

時間に向ふただ一の視角のみでなくして全視野がわれらに開かれてある。』一の成分の導入はわれらの科學的任意の^{ワイルキユウア}ことである、結合してゐる成分の出現は思惟必然のことがらである。前者はわれらにとりて自由であるが、後者に對してわれらは奴僕である。³⁾『此場合、Zeit 及 Zeitintervalle とは同一ではない、けれども、これを區別することなくして時間と譯した、シュトレアアの表現に於て、二者が代置せられてゐると考へるからである。

此見解に對して私は次のことを問題とする。靜態は果して時間から切りはなされたる、時間の間隔を保有しないところの概念であるか、時間を保有する經濟の概念は必然的に動態であるか、換言すれば、時間を導入することによりて靜態概念は動態概念に構成せられるか。此二の問題に對して、私はシュトレアアとは異なる答解を提示する外はないと思ふ。第一に靜態はすべて時間から切りはなされたる概念であるか。云ふまでもなく、經濟は經濟主體の經濟行爲の錯綜である、經濟行爲そのものが時間的經過を豫想する。從ひて經濟そのもの、又は經濟の機能は時間を離れて考へられうべくもない。勿論一定の經濟が特定の時間に於て營まれてゐる、此特定の時間は經濟理論に於て抽象せられる、これは今問題とするところではない。けれども、經濟行爲が本質必然的に時間の經過と結びついてゐる、此時間の間隔そのものは靜態概念から如何にして除き去られてゐるのであらうか。更に、眼を轉じて財の側を見る。その中にはあまたの用役財が含まれる、

3) ibid., S. 5.

而して、それが消費せられ、使用せられてゐる。而も用役財の數量はつねに、靜態の理論の骨子をなす交換方程式の中に入りこむ。此用役財の數量そのものが時間の経過を離れて全然考へがたいことである。土地用役の數量、労働の數量、資本用役の數量、持續的消費財（たとへば借家）の用役の數量、これらはみな賣買せられ、又は生産物に變形せられる、従ひて一般均衡の方程式の中に隱然含まれてゐる。而してその數量は一面に於て時間の経過の長さを意味するものではないか。靜態と時間との關係はただ次の如くに見るべきものであると思ふ。靜態にありては、需要供給に對する適應、供給の需要に對する適應が既に成立してゐるものと見られてゐる。それゆゑに、時間の経過が何等新なる變動を意味しない。價格の決定、生産物數量の決定に對して時間の経過から受くる作用と云ふものを顧慮することを要しない。靜態にありて時間は變動を意味しないのである。勿論十分なる適應又は均衡が成立してゐると云ふことは、之を種々に解釋することが出来る。種々なる適應、例へば需要の供給に對する、供給の需要に對する適應が一定の需要、供給、技術に關する與件の與へらるると共に、一樣に即刻に成立すると見ることも出来る（これが靜態成立の可能なる第一様式）。又は同時にはじまりて、一樣なる速さを以て成立するものと見ることも出来る（いはゆる同時化 Synchronisierung）。又一定の條件を假定してかかるときには、長期の摩擦の終了したる後に成立するものと考へることも出来る。かかる意味に於てならば、靜態理論が種々なる

適應の等時性 (Zeitgleichheit)、又は同時化を前提としてゐると云ひ得ぬこともない。而も靜態の意味することは此等時性である、更に精確に云へば、時間と變動との分離、變動を意味せざる時間である。時間そのものが靜態から抽象せられてゐると見るべき何の論據もないと思ふ。

靜態理論、又は靜學的理論にありては、種々なる適應の時間的關係を次の如くに見るはずである。先づロオゼンシュタイン・ロダンの分析を借らう。一般的均衡が成立するまでには次の諸作用、從ひて諸適應が完成されねばならぬ。

- | | | |
|---------|---------|---------|
| 一、需要↓價格 | 二、價格↓需要 | 三、供給↓價格 |
| 四、價格↓供給 | 五、供給↓需要 | 六、需要↓供給 |

但し此五の適應のうち、五六の二は前の四のものに含まれるから、それを省いて考へることも出来る。此等の五の作用又は適應が時をことにして營まれるならば、一般均衡が成立し得ない。ただ、此等の作用が同時にはじまり、且つ同一の長さをもつものならば、即ち一樣の時間内に行はれるものならば(經濟現象の同時的律動の假定 Annahme des simultanen Rhythmus der wirtschaftlicher Erscheinungen)、はじめて均衡が成立し得る。けれども此假定なくして、同時的律動なしとするならば、而してそれにつれて新しい變動が生ずるとするならば、そこに均衡の成立する餘地がない。私は此見解には更に吟味すべきものがあると思ふ。諸作用としてあげられたものは、なほあれだけでは盡きぬし、又その中に於て特に重要なものは四、價格の供給に及ぼす作用である。事實に於てこれは最も多くの時間を要する。その適應はつねに十分でない、その爲に價格が支配せられ、所得を通して需要が變動する。これが現實に於て靜態の成立しがたき真相である。勿論私は此形式的假定(同時的律動)が實在假定でなければ一般均衡理論が成立しないとも考へない。此理論の成立の爲には、かの形式的假定だけで十分である。

私は進みて考へる。一般均衡の十分に成立するためには、かの同時的律動だけでは足りぬであらう。同一の期間に於て適應

が完成するにせよ、例へば供給の變化が所得の上に、從ひて需要の上に作用するとするならば、均衡は完全に成立し得ない。供給が需要に適應することに需要は變化してゆくから。それ故に、供給の變化が需要函數に對する作用を認むる限り、適應を即刻的のものと見なければ、均衡は成立し得まい。そこで、クラアク的に需要函數などをはじめから一定のものと見てかゝれば、此同時的律動の假定も、即刻適應の假定も必要がなくなり、ただ長き期間、適應の行はれつくす長期のみが必要となる。

要するに、ロオゼンシュタイン・ロダンにありても、適應の行はれる時間 *Zeitspanne* の同一、又は同時化さへ假定せられるならば、一般的均衡が成立すべく、又『時間の除去』も亦可能であるとする。⁴⁾ しかし私は思ふに、此時間の除去はただ、經濟的諸數量の均衡關係の決定の上に、時間要素が作用せずと云ふだけの事、此決定のメカニズムに作用を及ぼさずと云ふだけのことであり、靜態が本來時間の經過を内含せずと云ふことではないと思ふ。靜態概念が時間を内含せずと云ふことと、靜態に於ける經濟的數量の相互的決定が時間の作用を離れて行はれうと云ふことは全く別である。後者は可能であり又必然でもあらう。前者はあり得ることである。

三、動態と時間

轉じて考へる。動態は靜態に於て抽象せられたる時間の要素（これは次のいろいろの言葉を以て云ひ表はされてゐる。Zeit, Zeitintervalle, Zeitstrecke, Zeitspanne）が取り入れられてゐる概念であると云ふ。果してさうであるか。勿論、動態の概念が時間の要素をとり入れてゐることは云ふまでもないがそれと靜態との對立がただ時間の介在と否とに盡さるであらうか。シュトレア自身も此問題を直接には肯定しない。と云ふわけはかうである。時間と思惟必然的に結びついてゐる

4) Rosenstein-Rodan, Das Zeitmoment in der mathematischen Theorie der wirtschaftlichen Gleichgewichtes, Zeitschrift für Nationalökonomie, Band I, Heft, S. 131.

る概念成分が導入せらるると、そこに動態の概念が形成せられる、と云ふ意味は、「靜態の概念の上に、時間を導き入れさへすれば之に結びついてゐる要素がまた導き入れられる、そこに動態の概念が形成せられる、靜態の上に時間をつけ足せば動態の概念が成立する」と云ふことである。けれども、私は此見方を成立し得ないものと考へる。時間と思惟必然的に結びついてゐるものは何であるか。シュトレアラは種々なる經濟的變動を時間と思惟必然的に結びついてゐると考へてゐるし、企業と時の好々 (Rechtzeitigkeit)、又は、最も有利なる時點との關係を論じてゐる⁵⁾。けれども、私は考ふるに、變動は何等時間と思惟必然的に結びついてゐるものではない。もしさう云ふ結合があるものならば、靜態を考へることが不可能ではないか。靜態についてはつねに其存續が考へられる、然るに、此存續する期間には勿論變動がないはずである。時間と變動とは全然切りはなされてゐる。變動は時間をまつ、時間なくして變動はないはずである。此意味に於て變動から時間ははなしがたい、それは變動と思惟必然的に結びついてゐる。けれども、時間から變動は切りはなされ得る。現實の萬法は流轉するにしても、思惟は變動なき時間を考へる。時間と思惟必然的に結合してゐるところの經濟的變動はない。時間を導入することによりて直に動態の概念が形成せられると見るのは何等の根據もない主張である。或は云ふものがあらう。現實の時間はすべて變動と切りはなしがたく結びついてゐるのではないかと。それは勿論さうであるが、此結

5) Streller, a. a. O. S. 167.

合は思惟必然的ではない。又此結合を導入して得らるる動態はもはや、理論的に構成せられたる動態ではないはずであらう。

私見によれば、動態に於て新に導入せられてゐるもの、従ひて、靜態とそれとの對立をなすものは、時間と變動との對應である。一方には時間の函數として變動があり、他方にはそれがない。もとよりこれは餘りに自明のことである、けれども、二者の區別は此自明の點以外には求めがたい。時間の介入の有無は變動の有無を意味せざるばかりではない、靜態に時間を認めないのも許しがたい見方である。かくて動態の特徴は何であるか。變動の内在であり、時間と變動との對應である。此事あるが故に、動態に於ける經濟的數量の決定の爲には時間が顧慮せらるるを要する。動態理論は時間を含むことを必要とする。靜態に於ける經濟的數量の決定の爲には時間が顧慮せらるることを要せぬ、靜態理論は表面に時間を含まざることを得る。けれども此理論構成の必要の點から直に、「靜態の概念が時間を除去してゐる、動態はさうでない、二者の差異は時間の介入の有無にあり」と云ひうべきではない。

要約して見よう。靜態にありても動態に於けるが如く、時間が含まれてゐる。けれども、時間と變動との關係が二者に於てそれぞれ別である。前者に於ては變動を伴はぬ時間であり、従ひてそれはただ永久に同一なる機能を意味するに過ぎぬ。後者に於ては變動と相對應するところの時

間である、而も此變動が一定の構想の下に置かれたるものであるが故に、その事情の下に於ては必然的である、かくてその時間は必然なる變動を含むところの時間である。かく見來れば、靜態と動態との對立によりて意味せらるるものは、時間の要素ではなくしてただ變動の内在と否とにあり、その結果として、靜態理論が所謂經濟的數量の決定に於て時間を切りはなすことが出来るし、動態理論が時間を切りはなし得ぬと云ふことになる。

四、靜學と動學とは全く異なる學問なるか(カレル)

今日、靜態が時間を含まず、動態が時間を含むと云ふ點から、靜學と動學との學問的性質を全く異なるものと見る立場がある。其考察に入るに先だちて、私は動態に於ける變動の内在と云ふことをくりかへし述べる。經濟理論に於て取扱ふところの動態はあくまで理論的に構成せられたる概念である。従ひて、その内部に存するところの經濟的變動は一定の假定せられたる事情に伴ひ、經濟の内部から必然に行はるるものに限られてゐる。此事情乃至豫件の選擇は理論の構成上、任意の事であるけれども、それが一度認めらるるときには、變動そのものが必然的である。従ひて此變動そのものは現實の經濟に於ける具體的變動そのものではなくして、一定の構想せられたる經濟の中に含まれるところの變動である。動態の考察が理論の範圍に屬するのはかう

云ふ事情による。勿論かかる事情、又は豫件の選擇は任意であるとは云ふものの、一定の指針に従ふのを常とする。而して此指針はつねに現實に於ける經濟の變動によりて與へられる。蓋し動學の目的が究局、此現實に於ける産業的變動を説明するにある以上、その中に假定としてとり入れらるるところの諸事情はすべて、現實に最も多く生ずるところの變動と密接に結びつけるものであることを要するからである。而もかの指針が現實の經濟にとらるると云ふことは、經驗的統計的方法が極めて多く利用せらるる理由となる。經濟靜學についてもかう云ひ得る。それが獨占を論じ、稀少價格(私の云ふ多占價格)を取扱ひ、又不完全獨占を考察するに際してこれらを説明すべき一定の與件を取り入れる。それがかくかくの與件を何故に取り入れるか、その選擇は任意である、けれどもその指針は現實の經濟によりて與へられる。獨占、不完全獨占にして現實の經濟に認められぬ事象であるならば、かかる與件もまた取入れられないであらう。けれども、此選擇の指針を現實の經濟に求めると云ふことは、何等理論の非現實的假設的性質を損ふものではない。而して現實からかかる指針は靜學の場合に於てならば極めて容易に得られる。動學の場合に於てはさうでない。それは事情の複雑のゆゑに、自ら複雑の手續を要する。統計的乃至歸納的な方法がそこに多く用ひらるるのもかかる理由にもとづく。けれども、現實からの指針を求むる爲にかかる方法に訴ふる點から、決して動學と靜學との性質に根本的差異ありと云ふ結論をひき出

すわけには行かぬと思ふ。

たとへば價格に於ける鉗形の運動 (scissor movement) がありとする。動學の仕事は一定の假定からこれの必然性を説明するにある。研究の順序は統計の手續によりて(與へられたる資料から例へば季節的變動や、長期的傾向を除くことによりて)此運動そのものを確認し、次に如何なる事情からそれが生じたかを明にすることであらう。けれども構成せられたる理論の順序としては、一定の假定を認め、それから如何にして必然にかゝる運動の伴ふかを明にするにある、従ひて此場合に於ける鉗形の運動は現實の事實ではなくして、構想の世界、假設の世界に屬することである。

かかる立場から、動學を歸納科學とするカレルの見解を吟味してみよう。勿論、その經濟學方法に關する見解の大體について茲に論じようとするのではない。カレルによれば、經濟靜學と動學とは決して同一の對象を有するのではない、全く異なる對象をもつてゐる。前者の對象は經濟の本質であり、後者の對象は此本質の存在の關係である。前者の方法は思辨であり、演繹であり、後者のそれは歸納 (統計的方法を重に指してゐる) である。『純粹理論經濟學の對象はすべての存在條件 (即ち、社會學的・心理的・技術的なる) からの抽象によりて得られたる純粹の國民經濟と云ふ對象性それ自体としてのみ考察せられたる本質、純粹の國民經濟である。われらは國民經濟の意義と、目的と、構成原理を (稀少性原理をさす——高田附記) 知るが故に、國民經濟を構成する根本原理から本質的事態を演繹することが出来る。演繹的景氣理論が可能である爲には、景氣が國民經濟にとりて本質的のものであること、純粹本質に屬する事態であることを要する。國民經濟の純粹本質、それ自

體として考察せられたる本質は純粹理論經濟學（これは事實に於て靜學をさしてゐる——高田附記）の認識對象である。純經驗的なる、國民經濟に本質的ならざる事態、國民經濟の本質の存在條件に基礎をもつてゐるところの事態は演繹せらるることが出來ぬ、經驗歸納的に確立せられなければならない。景氣が經濟に本質的に屬する事態でなく、事實に存在する國民經濟の純粹に事實的な現象であるならば、われらは此經驗的な事態を経験的に把握し、而して後に歸納的推理によりて此對象に關する一般命題に達しようと力めなければならぬ。『景氣が何等の本質的な事態ではなく、心理的技術的社會學的存在條件によりて制約せられたる現象であるならば、景氣研究にとりてはただ經驗的歸納的方法のみが問題となる』⁶⁾『純粹理論經濟學は國民經濟の純粹なる本質考察である。その對象は純粹なる國民經濟、即ちすべての時間的に制約せられたる、社會學的、心理的、技術的なものより切りはなされたる國民經濟である。それは、此本質の雜多なる具體化的因子から制約せられたる存在、實存的存在について、存在、法則性の經驗的實現について何物をも云はぬ、その判斷は論理的妥當性にのみ關する。』『經濟はただ、社會學的心理的技術的なものの仲介を通してのみ存在しうる。此仲介によりて一定時代の定型的なる經濟的現象が決定せられる。それから完全にわれらは離れる。』『純粹理論の對象は觀念的對象である。思惟によりて作られたる觀念的對象ではなく、國民經濟と云ふ實在的な對象性の、實在性を取去られ、思想的に把握せられ

6) Erich Carell, Sozialökonomische Theorie und Konjunkturproblem, 1929, S. 21—23.

たる本質である。⁷⁾『純粹理論、所謂靜學は價格利子、勞銀等の本質を、個別經濟の錯綜から生ずる數量關係を、取扱ふ。經驗的實在的理論、所謂動學は事象の經過を、個別經濟の錯綜に於ける原因結果の聯關を對象とする。對象の區別から、二の學問に於ける方法の區別が生ずる。純粹理論は演繹的、經驗的實在的理論は經驗的歸納的にその對象の認識にすすむ。⁸⁾』

五、その批判

カレルの見解が如何なところを目ざしてゐるかは明である。それについて私はかう考へる。經濟理論、そのいはゆる純粹理論の對象が存在の世界ではなくして觀念の世界であることは云ふまでもない。併しながら、此觀念の世界に於て經濟はすべての技術的な狀態から切りはなされてゐるか。勿論、與件と云ふことを單に現實に與へられたる條件と見るときには、觀念の世界、構想の世界が與件から切りはなされてゐること、明である。けれども經濟と結びついてゐる社會學的なるもの、技術的なものの狀態を與件として表現するときには、換言すれば現實の與件の外に、假定せられたる與件を考ふときには、それが經濟から切りはなされてゐるとは解しにくい。國民經濟とは何であるか、それはカレルによりて個別經濟の錯綜 (Volkswirtschaft = Incinandergreifen der Einzelwirtschaften) と解せられてゐる。而も此個別經濟そのものが一定の社會的技

7) ibid., S. 80.
8) ibid., S. 81.

術的條件の中にのみ存立し得るものではないか、此錯綜そのものが一定の社會的條件を意味するものではないか。然らばこれらの社會的、技術的條件は國民經濟から到底切り離され得ざるものである。また例へば、靜學としての純粹理論は利子を、勞銀を取扱ふと云ふ。而も此利子や勞銀は、もとより資本主義的經濟組織を外にして、云はば一定の社會學的條件と一定の技術的條件とを外にして考へ得られざるものである。さう考ふときには、經濟そのものと此等の社會學的なるもの、技術的なるものは不可離の姿に於て結びついてゐる。此等の條件の實在的なるものはなほ經濟の存在と結びついてゐる。けれども、一定の假定的、觀念的なる條件はすべての實在的要素をぬぎすてたる經濟、觀念の世界に於ける經濟にもまた、不可離の姿に結びついてゐるはずである。それは經濟の中に内含せられてゐる。經濟の本質とは何ぞや。これを全然社會的のものから切りはなして考へる立場もある。けれどもそれを、交換經濟について考へる限り、すでに社會的要素を十分にとり入れてゐる。それが何故に資本主義的社會關係をとり入れ得ないか。今それが例へば當然に資本主義經濟を含むとしよう。さうすれば、階級の分立、資本の蓄積と云ふ社會學的なる要素が内含せられてゐるはずである。これが切りはなされたところに、何等の資本主義經濟も考へられるわけではない。觀念的なる條件は經濟の中にあり、之をある意味に於て作り上げてゐる。而して、靜態に於ける經濟はこれらの與件の一定の姿と結びついてゐる、而して

動態にありてはそれが與件の更に複雑なる姿と結びついてゐる。かゝる複雑なる條件と一定の變動との間に如何なる必然的聯絡の存するかを明にする事が動學の仕事である、そこにはもはや、何等の實在も取扱はれるのではない、條件も變動もすべて假定の世界、觀念の世界に屬するものである。或は、靜學に取扱ふものは經濟の本質から演繹せられうるものであり、種々なる與件と結びついて成立するものは、もはや、經濟の本質に屬するものではないと云ひ得るやうに見える。けれども、靜學的命題が經濟の本質から導き出さるると見ゆるのは、そこに一定の條件が取り入れられてゐるからである。それはなるほど經濟そのものから導き出されてゐる。而も此導き出しには、既に一定の社會的技術的條件が内含せられてゐる。更に他の條件を内含せしむることによりて、當然に動學的命題が導き出される。靜的なもののみが經濟の本質に屬すると云ふことは出来ぬ。例へば生命を見よ、睡眠と、覺醒と、疲勞と、恢復と、健康と、疾病と、何れもこれは生命に結びついてゐるものである。勿論、疾病なく、疲勞なくば生命なしとは云へぬ、けれども生命そのものがそれに結びついてゐる條件の如何によりてこれらすべての状態を含んでゐる。それと同様に、靜態的なもののみが經濟の本質に屬すると考へ得べき何ものもない。若しさうであるならば、資本の蓄積すらも經濟の外にあるであらう。睡眠と覺醒とが生命に結びついて離れないやうに、靜態も動態も等しく經濟から離れない、經濟は此兩者を自體の中に包括して

る。經濟に伴ふ條件、ある意味に於ては經濟に内含せらるる條件の如何によりて、靜態であり、又動態である。兩者は共に經濟の本質の中に含まれてゐると見得られないか。動態をあくまで社會學的技術的存在條件と結びつけようとするのは、動態をただ實在的のものとのみ見て、而して構成せられたる觀念的のものと見ざる結果である。カレルは「靜學は資本を取扱ひ得ないであらう、何となれば、靜學は時間を取扱はず、而も資本は時間を離れて考へられざるが故に、」と云ふフオオゲルの批判に答へて、實在的な具體的時間と、時間に於ける Soseins-Moment 即ち Sosein Zeitstrecke とを區別するときには、資本が靜學に於て取扱はれ得ざるわけではない、と云つてゐる。此考方を貫くときには、何故に、經濟の變動そのことについてもまた、一方具體的實在的な變動を認むると共に、此實在的具體的條件から切りはなされたる經濟的變動自體を認め得ないのであるか。

健康と疾病と共に生命に屬し、生命の一狀態をなすが如く、靜態も動態も共に經濟に屬し、經濟の一狀態をなす。此何れも理論的に、從ひて觀念的なものとして構成し得られる。而して、その各に存立する本質的聯關（これと因果關係との聯絡については、根本的な立場を此上考へたる上にて論及したい）を考察することが出来る。此意味に於て靜學が純粹理論であり得るが如く、動學が純粹理論であり得ざる理由はない。もとより、このことは動態、ことに景氣に關する

9) Carell, Methodik u. Erkenntnisobjekt einer Theorie d. volkswirtschaftlichen Dynamik, Jahrbücher f. Nat. u. Stat. 78 Bd. S. 53.

統計的歸納的なる考察、いはゆる經驗的考察の重要と可能とを否定するのではない。

靜態に於ては、時間の要素を缺く、と云ふシュトレア見解は、その實、すべての時間的間隔の相等しいことを意味するものであらう、とフオオゲルは云ふ。而して更にすゝみて、それだけで靜態の特徴が盡くされてゐるのではない、すべての經濟的關係に於ける數量的性質的變化のないこと、これが靜態の特徴であると述べる。此見方は私の見方に近いとは云ふものの、それはあまりに自明なる表現ではなからうか。フオオゲルはなほ、純粹理論としての動學を認める。而して動態と靜態とを共に同一なる認識對象の異なる状態であると見てゐる。私もこれを肯定する。異なる状態は如何にして存立するか。それは一定の與件の故である。與件のある姿と經濟との間に必然の聯關がある。

カレルは云ふ。一の對象にとりて本質的なものは、すべての瞬間に於て、それに屬してゐなければならぬ。此非因果的な、論理的に必然的な數量關係は各瞬間に於てすべての實在的に存在する國民經濟に必然的に屬してゐる。國民經濟の本質に屬してゐる。いつ又どこで、國民經濟を見るにしても、此關係をそれについて表現し得る。事變のもの、實在的事變の無限なる多様については、さうではない。國民經濟に於て、あらゆる瞬間に存在してゐる一の事變と云ふものはない。景氣の事態はただ短き瞬間だけ經濟に存する、あらゆる瞬間に、それに屬するのではない、それに本質的なのではない。¹⁰⁾この考方も、一方には事變としての景氣と本質としての景氣が同視せられてゐるし、又他方、靜態的數量關係がすべての瞬間に於ける經濟に屬すると云ふ認容しがたきことを認容してゐると云ふ點に於て、支持し難いと思はれる。¹¹⁾フオオゲルはまた單なる數量關係が如何にして國民經濟の本質をなし得るか、と反問してゐる。

(完)

10) Carell, a. a. O. s. 103—104.

11) Vogel, Methodik u. Erkenntnisobjekt u.s.w. Jahrbücher f. Nat. u. Stat. 77 Bd. S. 336.